

南波止場1番地

鈴木志郎康のb2evolution blogです

アーカイブ: **2008年10月**

2008/10/13

🕒 17:46:46, カテゴリ: [memo](#), views: 4079 | 🇯🇵

浜江順子詩集『飛行する沈黙』を読む。

浜江順子さんとはお付き合いはないが、一、二度お会いしたことがあって、瘦せぎすの元気のいい人という印象だった。その浜江さんから朔太郎賞受賞のお祝いのはがきを頂いた。礼状を送ったら、『声の生地』を購入して読んで感想を送ってくれた。そこにもうすぐ浜江さんの詩集が出ると書いてあったが、先日、その詩集『飛行する沈黙』が届いた。わたしの詩集をわざわざ買って読んでくれたのだから、わたしも浜江さんの詩集も読んで感想を送ろうと思って読んでみた。

一通り読んで、「言葉をぶつけて力を生み出す詩でした。思考が感情を絞り出す、またその逆を行く世界が展開していて、その抒情とユーモアを楽しみました。」という感想をはがきを書いて送った「灰皿町Blog日記」にはもうすこし砕いて、「詩集の詩は、言葉の意味を遮断して、言葉同志をぶつけて力を感じさせる類の詩だった。そのぶつけ方が思考から感情を絞り出す、または感情から思考を展開するというやり方で、野菜や植物や季節感や身体を言葉でぶつけるので、そこから抒情とユーモアが生まれてくるというわけ。」と書いた。こう書いてしまうと、自分が書いた言葉を反芻しているうちに、もうちょっと書かないと、この詩集から離れられない感じになってきた。「意味を遮断して」とか、「言葉同志をぶつける」とか、「思考から感情を絞り出す」とか、どういうことを言っているのか、もう少しはっきりさせたいという思いが湧いてきた。

『飛行する沈黙』の詩は、積極的に言葉を受け止める姿勢を取らなければ理解できない類の詩が多かった。冒頭の「白昼の爪」からして、一読しただけでは、よく分からない詩だった。分からないなりに言葉を辿っていくと、感情が動いていることは感じられた。そういう風に、分からないなりに読み終えて、浜江さんに感想を書いて送ったというわけ。浜江さんは詩集の後書きに、

「詩において沈黙は重要な意味を持つてくる。例えば、M・メルロー＝ポンティが『シーニュ』の中で、“要するに、われわれは、発言される以前の言葉を、言葉をとり巻くことを止めずそれなしではことばが何ものも語ることはないあの沈黙の背景を考察しなければならぬ。あるいはまた、言葉に混りあっているあの沈黙の糸をむき出しにしてみなければならぬ”(『シーニュ 1』「I 間接的言語と沈黙の声」粟津則雄訳、みすず書房)というように沈黙は詩において極めて重要なファクターである。

『飛行する沈黙』 における沈黙は、その背景に広がるものはもちろん、重い沈黙、軽い沈黙、あるいは死の沈黙、未来への沈黙など、さまざまな沈黙がそれぞれの詩の中に渦巻いている。沈黙は、ある時は自分のなかで処理しきれずにうずくまって悩む場所であり、あるいはひ

南波止場1番地

南波止場1番地の鈴木志郎康の家

- [最新](#) (キャッシュ)
- [最新](#) (キャッシュされない)

2008年10月				
日	月	火	水	木
			1	2
5	6	7	8	9
12	13	14	15	16
19	20	21	22	23
26	27	28	29	30
<< <				

- [最近のコメント](#)

Heavy Hitters

- [白鳥信也詩集『ウォー! カー』の詩の解説](#) (13 visits)
- [愛を生ききる台詞 水邦夫の戯曲について](#)
- [長尾高弘詩集『右向け! 年4月6日発行』](#) (10 visits)
- [「第6回萩原朔太郎賞 鈴木志郎康」に行っ](#) (visits)
- [坪田義史監督作品『美い気分』『ガロ』の漫画の境涯](#) (8 visits)
- [渡辺洋詩集『向日 歌: 肆山田2010年刊』の感](#)
- [森三キ工詩集『沿線植](#) (visits)
- [須永紀子詩集『空の庭、想](#) (6 visits)
- [五十嵐倫子詩集『色ト! の感想](#) (6 visits)
- [南原充士詩集『笑顔の](#) (6 visits)
- [表現の現前性\(多摩美術 劇学科年報「映像演劇](#) (visits)
- [Ex@lorerからの書き込](#)

とり憩う場所でもある。これら二十五篇の詩を通じて、さまざまな沈黙と言語の飛行を思い思いに感じていただければ幸いである。」

と書いている。なるほど、「沈黙」ということか、と頷けるように思った。言葉になる前の、また言葉で語られないところ、それを言葉で書いたのだから、そう簡単には理解できないのも無理はない、と思った。そこで、このことを頭に置いて、冒頭の「白昼の爪」を読み返してみることにする。

白昼の爪

木陰に隠れて爪を研ぐものの気配に
桜に足をたっぷり浸して
地獄の眠れる扉をたたく

桜は薄紅色の下に
烏賊の墨のような腹黒さをなにやら薄っすらと秘め
ゆらゆらと起立している

夢に厚みはいらない
うすっぺらな板のようなものこそふさわしい
穂を生やして、さあ飛んでいけ

獣たちの声をかき集め
街を脱出すると
果物たちはかえって騒ぎ出す

蒼ざめた顔が連続する悲劇を
逆転するある律動のなか
白昼の片隅に見つける

ゆれて、ゆれて
爪は磨かれ
乳房は春に肥大しながら昇っていく

ざらざらする真実を
吹きさらしにし
白骨にしてから飛ばすがいい

ゆっくりじらして楽しむものは
歯茎をタンタンと二回鳴らし
決まって美の世界を礼賛する

沈殿するなにかと
浮き上がるなにかが相克する時
身体の一部と化した赤色の鰓を鮮やかにひるがえす

両生動物のようなぬめつとした心臓を
ひとなでしてから
唇を舌で舐めると、そこは見たこともない沼

「白昼の爪」は3行10連で30行の行分けの詩だ。まず、タイトルから検討してみよう。「白昼」は比喩的に使われていて、物事があからさまになる状態にあるということで、タイトルは爪の存在があからさまになるという意味合いであろう。詩の本文を読むと、その「爪」は手や足の爪でも、動物の爪でもないように思える。これもまた比喩で、第一行目に「爪を研

検索

- 全ての語
 いずれかの語
 フレーズ

検索

カテゴリ

- [All](#)
- [memo](#) (24)
- [日記](#) (4)

選択

アーカイブ

- [2013年4月](#) (1)
- [2010年8月](#) (1)
- [2009年8月](#) (2)
- [2009年7月](#) (2)
- [2008年12月](#) (1)
- [2008年10月](#) (1)
- [2008年9月](#) (3)
- [2007年12月](#) (1)
- [2007年11月](#) (2)
- [2007年10月](#) (3)
- [2007年5月](#) (1)
- [2006年6月](#) (3)
- [続き...](#)

いろいろ

- [管理](#)
- [プロフィール \(admin\)](#)
- [ログアウト \(admin\)](#)

このブログの配信

- RSS 0.92: [投稿](#), [コメント](#)
- RSS 1.0: [投稿](#), [コメント](#)
- RSS 2.0: [投稿](#), [コメント](#)
- Atom: [投稿](#), [コメント](#)

[What is RSS?](#)powered by
b2evolution

ぐ」とあるから、戦う姿勢を示す意味合いで使われているようだ。つまり、身を持って戦う姿勢が明らかになったということになる。それは意味合いとしてのことで、イメージとしては日にさらされた白い爪が浮かんでくる。ちなみに、詩集に挟まれた葉に文章を寄せた河津聖恵さんは、「『爪』というのはこの詩人の抗いの象徴だが」と書いている。

第一連の意味合いは、戦う気持ちを高めて、地獄の扉を開いて、災いを生むかも知れないような大事を起こそうということだが、二行目の「桜に足をたっぷり浸して」がわたしにはよく分からない。「お湯に足をたっぷり浸して」なら、疲れをとってということになるが、「桜に足をたっぷり浸す」とはピンクに染まっていくということだろうか。とにかく、余裕を持って戦いの挑むらしい。第二連では、桜のピンクにも腹黒さが秘められていると告げて、第三連で夢を捨てて居直るということになる。

第四連で叫びながら街を脱出すると、大人しい連中は騒ぎだし、第五連で顔を青ざめる連中が続出するのが明らかになる。第六連では、その騒ぎの中で詩人はますます戦意を募らせて、気持ちを高揚させる。第七連では、本当のことなどどうでもいいと思い、第八連で、ことの次第を美しいと舌鼓を打って楽しむ。第九連で、浮き沈みする者たちが交錯するのを見て、身をよじて喜ぶが、第十連で、どちらでも生きられるようになった自分の心臓を確かめると、そこにはまた別の世界が開けている。と、まあ、詩から読み取れる言葉を辿って、生きる上での戦いをストーリーに仕立ててみた。

第四連の

獣たちの声をかき集め
街を脱出すると
果物たちはかえって騒ぎ出す

も、第六連の

ゆれて、ゆれて
爪は磨かれ
乳房は春に肥大しながら昇っていく

も、結構面白い言葉の並びだ。作者は「あとがき」で「重い沈黙、軽い沈黙、あるいは死の沈黙、未来への沈黙など」があるといっている。それらの「沈黙」は実生活での言えない悩みだったり、言えない怒りだったりするのだろう。その悩みや怒りを生んでいる他人や事柄に詩人は勝手に言葉を投げつけて、書き留める。「果物たち」「蒼ざめた顔」など、それが一種の提喻となって、その提喻だけの組み合わせで文が出来上がり、読者に取っては意味が遮断されるが、言葉をくっつけたところに力が生まれる。

詩集のタイトルになっている「飛行する沈黙」という詩は、散文で書かれているが、西欧の中世を語り、その中世を頭に抱えて、現代のコンビニを利用して生活する自分に思いを馳せると、自分の姿が見えなくなり、「沈黙自体」になってしまうと語っている。詩を書く人間として、思想を辿って考えると、考えと生活的現実の間に裂け目が生じて、その裂け目に落ちて行方不明になというわけ。生活から生まれる感情ばかりでなく、表現にまつわる思考からも感情が滲み出て堆積される。

自意識からも逃れられない。その自意識に身体の手を投げつける。そこにユーモアが生まれてくる。

尻の穴から
すうっと入ってきた化け物は
実は自分自身で

と始まる「化け方が、うにゅうにゆだ」という詩では、化け物を「化け方

が足りない」と罵りまくる。また、自己否定しきれないところに、詩人の優しさがあると感じる。最後に沈黙を破って生活を語る詩を一つ。

追突する、あぶら蟬よ

あぶら蟬が自転車で走る私の後ろから追突する
蟬の狂気とヒトの狂気がごちゃまぜになって
トマトケチャップ的にいい感じになる
またも、あぶら蟬は背中に突進する
あぶら蟬の真意がわからないままに
夏がうにゆうにゆ爆発する
ヒトはまだ気がつかない
あぶら蟬より自分がヤパイってこと
ニンゲンはただ突っ込むだけなんだよ
あぶら蟬が背中をノックしても
気がつかない
ニンゲンはただ突っ込むだけなんだよ
コロン、コロン、林で死んでいるあぶら蟬を見ても
気がつかない
ニンゲンはただ突っ込むだけなんだよ

浜江順子詩集『飛行する沈黙』2008年9月30日 思潮社刊

• [編集](#)



Original template design by [François PLANQUE](#).

